村山民俗学会

第399号
発行日　2025年1月1日
発行責任者　相原　一士
編集担当　岩鼻通明

新年のごあいさつ

会長　相原一士

あけましておめでとうございます。会長に就任して初めての新年を迎えました。会報は来月の２月号で通号400号を迎えます。これまで以上に多くの会員のみなさまからの寄稿をお待ちしております。では、本年も、どうぞよろしくお願い申し上げます。

ナンキンコゾウについて　その３

井上 吉典

更に飛島つながりで調査を続けていくと今度は民俗学者の著書を見つけることができた。それも超大物、柳田以後最大の民俗学者と言われる宮本常一である。宮本が飛島まで調査に来ていたのだ。その成果が「酒田市飛島のもらい子」（昭和３０年）（「忘れられた子どもたち」所収）である。

「この島には南京小僧とよばれるもらい子たちがいた。南京小僧という名は新聞記者のつけたものであるという。本土からもらって来る子どもたちを南京米袋に入れて隠して来たからこの名があるというのはどうやら後のこじつけで、この島では漁業のときの作業衣に南京米袋を利用してつくったものを着ていた。すべての人がそうであったのではなく、貧しい人達がそうだったのだが、もらい子たちも多くこの南京米袋で作った作業衣を着ていた。その印象から名付けられたもので、島民が言い出したことばでなかったから、島民が後に島民なりの解釈をしたのであろう。島の人たち同士の間ではただもらい子といっている。そして明治初年の戸籍を見ると、もうたくさんのもらい子があったことがわかり、それは南京米袋以前に属することである。」

南京小僧の呼称について、宮本は彼らの作業衣が南京米袋製だったことによるが、命名者は新聞記者であったとしている。宮本は熟練した民俗学者として、当然のことながら現地に入り、本文で紹介した調査者の中で最も詳細な聞き取り調査を行っている。宮本はこういう調査に関してはプロ中のプロである。宮本説が最も妥当なのではなかろうか。

「私が話を聞いた本間さんの父も、もらい子の一人であった。その父がコレラで死んで５歳ぐらいのときに孤児になった。そして明治の初めに飛島へもらわれて来た。はじ